「本当の友達に国境はない」

福井県立高志中学校　２年　高　添翼（こう　てんい）

ぼくは、五さいから日本で暮らしている中国人です。

学校にいると、いつも友達が話しかけてくれ、いっしょに会話を楽しんでいます。家にいるときでも、友達と電話やチャットをし、楽しんでいます。学校がない日もいっしょに出かけたり、卓球をしたりします。ぼくの周りには、友達しかいません。けれど、こういう日々をぼくは予想したこともなかったのです。

日本に来たとき、ぼくはまだ年長でした。飛行機に乗っていた時、ぼくは胸がつぶれるほど不安と緊張でいっぱいでした。今でもあの日のことをはっきり覚えているほどです。けれど、実際の日本はぼくにとってすごく新しく、驚きの連続でわくわくがとまりませんでした。

ところが、幼稚園に入った日がぼくの将来を大きく変えてしまいました。みんな宇宙人のような言葉を話すのです。新入りのぼくに、何人かの人は話しかけてくれましたが、当然ぼくにはその意味がわかりませんでした。みんなは、ぼくが日本人じゃないことに気がついたとき、半分あきらめたような顔でぼくのそばを離れたように感じました。

ぼくは排除されたのだろうか…。その答えはぼくには分かりませんでした。幼稚園にきた最初のころは、一日が三日のように長く感じました。そして、このような状態に追い討ちがかかるようになったのです。一人の男の子が急にぼくのことを追いかけるようになったのです。ぼくは必死に逃げているのに、周りの人はみていないふり。ぼくにはその理由がわかりませんでした。

もうだめだ。もうたえられない。ぼくは、思いきって親に相談してみました。そしてこの日がぼくの未来を大きく変えたのです。その男の子はぼくと遊ぼうとしていた。周りの人もその子がぼくと遊ぼうとしていたのが分かっていたから、じゃまをしないように気をつかってみていたという事実がわかったのです。

ぼくは、排除されてはいなかった。その日から、彼はぼくの親友になりました。やがて、彼は先生から、ぼくが日本人じゃないということを聞くと、毎日、ぼくに日本語を教えてくれるようになりました。ぼくはうれしかった。ときには汗をかきながらあきらめずがんばる彼により、ぼくはたった三か月で簡単な会話ができるようになりました。その恩人とも言える彼とは、今では離れ離れにはなってしまったけれど、それでも毎年年賀状を送り合っています。言葉というものは本当にすごい。基本が身につけば、あとは生活している間に自分で学ぶことが容易になり、自分で学ばなくても、自然に覚えてしまったりさえします。ぼくが、この文章を書けるようになるほど、名前を言わなければ日本人にしか思われないようになるほど日本語が上達したのは、全てその子のおかげです。彼は、ぼくにとっての中国と日本の架け橋になってくれたのです。もし、彼がいなければ、ぼくは日本をあきらめてしまったかもしれない。もし、彼がいなければ、ぼくはこの人生をいやになってしまったのかもしれない。ぼくは、この子のことを一生忘れません。

日本は本当にすばらしいです。人はやさしく、困ったらすぐに助けてくれます。ぼくが今のような生活を送っているのも、ぼくの友達のおかげです。彼だけではない。周りにいた友達全員が助けてくれたのです。ぼくはどう感謝の気持ちを伝えればいいかわからない。ぼくができるのは、今度はぼくが友達をいっぱい助けることだけだと思っています。

人は一人で生きていくことはできません。人は周りを助けたり、周りから助けられたりしながら生きていくのだと母国の漢字がぼくに教えてくれます。

普段の学校生活はもちろん、塾や部活も楽しいと感じるのは周りに友達がいるからこそです。年れいや性別、人種は違っていても、みんな「心」をもっています。心がつながっているからこそ、友達になれる。ぼくはそう感じています。

本当の友達に国境はありません。今日もこの言葉を心に刻みつけて充実した生活を送っているぼくがここにいます。